

積極的にコミュニケーションを 図ろうとする態度を育成する指導方法

— 「話すこと」に意欲的に取り組む場面設定の工夫 —

宇田 晃¹

英語学習における「話すこと」は、教師に提示された英文や、生徒それぞれが書いて準備した英文を再生することが多く、意欲が高まらない一因となっている。そこで、本研究では生徒の実生活に即した場面を設定し、その場にふさわしい表現を予測させた。コミュニケーションを図る楽しさを味わわせることによって生徒の話す意欲を高めることができると考え、実践・検証を行った。

はじめに

「外国語を通じて、…積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」は、小学校、中学校、高等学校それぞれの学習指導要領に示されている外国語（活動）の共通の目標である。小学校外国語活動では、外国語に慣れ親しむコミュニケーション活動により、「コミュニケーションを図る楽しさ」を体験させることで、英語に対する肯定感の育成に一定の成果を上げている。ところが、中学校になるとその肯定感は下がり、高等学校では学習意欲そのものに課題があると指摘されている（文部科学省 2015）。

「コミュニケーションを図る楽しさ」は、自分の考えや気持ちが、外国語で相手に通じたという成功体験によって味わうことができる。ところが、中学校では、話す活動がモデル対話の暗唱や、話す内容を事前に準備して再生する活動となり、この成功体験と結びつかず、話す意欲が高まらない一因となっている。

小学校学習指導要領解説外国語活動編では、「コミュニケーションの楽しさを味わうことなしに、コミュニケーションへの積極的な態度を育成することは難しい」（文部科学省 2008）としている。

この「コミュニケーションを図る楽しさを味わうこと」を中学校の指導にもいかすことで、外国語で伝え合う意欲を高め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成できると考えた。

研究の目的

本研究は、「話すこと」への意欲を高めるために、英語で「やりとり」をする言語活動の指導方法を工夫・改善し、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を目的とする。

研究の内容

1 「話すこと」の課題と実態

(1) 「やりとり」の指導と課題

「話すこと」は、その場で考えて話す「やりとり（Spoken Interaction）」と、原稿等を準備して話す「発表（Spoken Production）」とに分けられる。中学校学習指導要領では、「話すこと」の指導事項としてこの「やりとり」のことを、「聞いたり読んだりしたことなどについて、問答したり意見を述べ合ったりなどすること」と表記している。即興性のある会話や討論等の「やりとり」は、伝えたいことを表現するために、単語や文法などを瞬時に活用する力が求められる高度な技能だといえる。

中学校学習指導要領解説外国語編（以下、「中学校解説」という。）には、「実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの活動においては、具体的な場面や状況に合った適切な表現を自ら考えて言語活動ができるようにすること」（文部科学省 2008 p. 20）と示されている。しかし、多くの授業で行われる「やりとり」の言語活動は、単元の文法事項を含んだ例文のパターン練習となり、実際の使用場面をイメージしにくく、ともすれば生徒全員が同じ表現を使うような指導になりがちである。「やりとり」の指導方法に、自分の考えや気持ちを表現する「自己表現」の充実を図り、「コミュニケーションを図る楽しさ」を体験するための手立てが必要である。

(2) 英語の使用場面のイメージを持つこと

「中高生の英語学習に関する実態調査 2014」（ベネッセ教育総合研究所 2014）では、英語が好きであると、日常生活や将来の仕事等で英語を使うイメージを持つことにつながりやすいと考察している。

また、「平成 26 年度英語力調査（高校 3 年生）結果の概要」（文部科学省 2015）では、英語力が高いほど、将来の英語使用のイメージが明確な生徒の割合が高いと分析している。

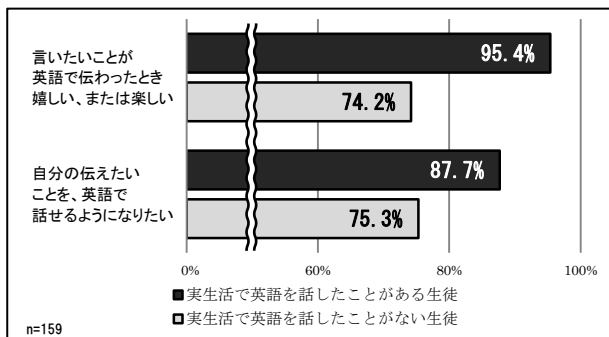
1 山北町立山北中学校
研究分野（授業改善推進研究 外国語（英語））

これらの調査結果から、実際の英語の使用場面のイメージを持つことが英語学習の肯定感と関連していると推測できる。

(3) 生徒の実態

平成 27 年 7 月に山北中学校 1、2 年生 161 名を対象に事前アンケート調査を行った。英語学習に関する調査において、「言いたいことが英語で伝わったとき嬉しい、または楽しい」と回答した生徒が全体の 82.4%、「自分の伝えたいことを、英語で話せるようになりたい」と思う生徒が 79.9%であった。全体の約 80%の生徒がコミュニケーションを図る楽しさを感じ、英語で話せるようになりたいと意識していた。また、生徒の英語の使用状況に関する調査では、40.9%の生徒が「実生活で英語を使って A L T 以外の外国人と話したことがある」と回答した。

この調査結果を、実生活で英語を話したことがある生徒とない生徒で分析し、英語の使用状況による学習意識の差を比較した(第 1 図)。その結果、実生活で英語を話したことがある生徒の「伝わったとき嬉しい、または楽しい」と思う割合が 95.4%と非常に高く、また「話せるようになりたい」という意欲も 87.7%の生徒が示していた。しかし、実生活で英語を話したことがない生徒は、「伝わったとき嬉しい、または楽しい」と思う割合が 74.2%、同時に「話せるようになりたい」という意欲も約 75.3%と実生活で英語を話したことがある生徒と比べて低いことが分かった。



第 1 図 英語の使用状況による学習意識の差

2 研究の仮説

以上のことから、生徒に英語を使用するイメージを持たせるために、実生活で外国人と英語で話すような具体的な場面を設定することが、「話すこと」への動機付けの手立てになると考えた。そして、実際のコミュニケーションで実感できる嬉しさや楽しさを、題材を通して味わわせることで、話せるようになりたいという意欲を高められると考え、次の仮説を立てた。

仮説

「実際の英語の使用場面を設定したタスクを行うことで、意欲的に英語で伝えようとする態度を育成できるであろう。」

3 研究の方法

「実際の英語の使用場面」の設定については、「実生活に即した場面」と「場面にふさわしい主体的な表現」の二つに分けて整理した。

(1) 「実生活に即した場面」の設定

ア 具体的にイメージできる場面設定

学習開始時の動機付けとしてドルニェイ (2005) は、「教材を学習者にとって関連の深いものにする」ことを挙げている。

題材について中学校解説には「生徒の身近な暮らしにかかわる場面」(文部科学省 2008 p.21) とある。生徒が具体的にイメージできる、実生活に起こりそうな場面を設定することで、学習への動機付けを図る。

イ 自己表現意欲を高める設定の工夫

題材を身近なものにするだけでは、話す意欲は高まらない。田中武・田中知 (2003) は表現意欲を高めるポイントとして、必然性、具体性、自己関連性、自由度を高めることを挙げている。場面設定においては、登場する地名や人物を生徒が身近に感じられるものにする自己関連性ととも、英語で表現する必要があると思わせる必然性を高めることが重要である。そうすることにより、英語での自己表現意欲が高まる。

ウ 生徒の英語の使用状況をいかした設定

山北中学校の生徒の英語の使用状況を場面設定にいかすために、実生活で英語を話したことがある生徒に対して、その会話の内容について調査した。その中で最も多かったのが、最寄り駅や沿線の駅、電車内で目的地までの案内をするものであった。他の回答には、温泉の入り方に関する質問や、観光名所について話しかけられるなど、地域の特色が現れるものもあった。

検証授業では、回答が最も多かった目的地までの案内を、最寄りの山北駅で行う設定にした。

(2) 「場面にふさわしい主体的な表現」の設定

場面にふさわしい会話の内容を生徒自身が設定する。現実話す場面を意識させるために、会話のモデルとなるスキットを自ら予測させることとした。

ア タスク

生徒が主体的に課題に取り組む工夫としてタスクを行う。生徒に与えられる課題がタスクと見なされるための条件として松村 (2012) は、「活動成果の重視」、「意味へのフォーカス」、「自然な認知プロセス」、「学習者の主体的関与」の 4 点を挙げている。

ここでのタスクとは、生徒一人ひとりが課題を解決するために英語を使う活動とする。また、間違いを恐れずに意欲的に伝えようとする態度を尊重するために、形式(文法等)より意味(内容)を重視する。使用する単語や文法等の言語材料は指定せずに、主体的な判断で目的を達成する活動とする。

このような活動の場合、生徒への支援として、使用が予想される単語や文を教師が例示し過ぎることがあ

る。これは、知識や技能を活用する力を育む機会を失わせると同時に、生徒の表現内容に固定的なイメージを持たせ、表現の自由を制限してしまう。生徒にとって「実際の英語の使用場面」とするには、個々の主体的な判断に従って会話を進めることが大切である。

また、タスクの設定は、課題を解決して相手に喜ばれたり感謝されたりするものが望ましい。それにより、英語が通じる楽しさだけでなく、伝え合う内容や相手を思いやるなど情意面においての「コミュニケーションを図ることの大切さ」を知ることができ、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながると思うからである。

イ 協働学習

タスクを行い、生徒一人ひとりが考える課題解決の方法を尊重すると、表現する内容もそれぞれ異なってくる。こうした場合には、英語による表現が困難になりがちなため、教師にその答えを求めてしまうことも多い。そこで、英語表現そのものについての質問には答えないこととし、仲間と協働して主体的に課題に取り組む学習形態を活用することとした。

一人では気付くことができなかつたスキットの展開や英語での表現方法を共有し、表現の選択肢を生徒自身で増やす。そうすることで、生徒同士の相互作用をいかしながら課題解決へと向かい、ふさわしい表現を自ら考えたという実感を持つことができる。

ウ スキットの予測

課題は、準備時間をとらずにその場で考えて話す即興性のある「やりとり」に、生徒がどのような学習をして臨むかである。本研究では、設定した場面で使用される表現を生徒が予測し、事前に英語で準備することとした。

予測について言語学者の井口（2013）は、「私たちは文章を理解しようとする場合、ある程度その内容を予測しながら聞いたり、読んだりしているのではないかと仮定している。そして、「母語の場合には言語内・言語外の知識から次の内容も予測しやすいが、外国語の場合には予測のための知識が不足しているということもある」（井口 2013 p. 123）と述べている。脳科学ではまだ検証されていない見地であるが、「母語でも外国語でも、その文の内容を理解し、ある程度次に来る文の内容を予測できるというのはきわめて重要なことであり、これができてこそ実際にコミュニケーションが成り立つ」（井口 2013 p. 125）また、「会話教材としてはあらかじめ予測される語彙をあげておくことにより、スムーズな会話が成立する」（井口 2013 p. 133）としている。

しかし、予測される語彙が人それぞれ異なることを、堀口（1990）は、次のように述べている。予測は「聞き手の話し手に関する知識や情報、聞き手と話し手との関係、聞き手と話し手との了解事項の有無、話し手

の声の調子や表情や身振り、話の内容に関する知識、常識、場面、文脈などいろいろな要素が作用しあって可能になる」（堀口 1990）としている。

コミュニケーションの成立には、言語予測が重要な役割を果たしているだろうが、その予測は個人が持つさまざまな条件によって異なるというのである。

そこで、生徒自身が場面や状況にふさわしいと思うスキットを予測し、使用するであろう表現を英語で準備してから、実際の「やりとり」を行うこととした。これは、会話の際に無意識に脳が作業している過程を、意図的に表出したこととなる。このことが、英語でのスムーズなコミュニケーションを図るための準備として、自然な認知過程であると考えた。もちろん、会話が進む中でスキットが予測通りに展開するとは限らない。しかし、そこで英語での表現を準備した経験をいかして、その場で考えて話すことこそが、即興での「やりとり」の目標であると考えた。

4 検証の方法

検証授業を行い、研究の仮説と研究の方法の有効性について、次の検証結果から分析・考察する。

(1) 生徒の感想

毎授業後に行った振り返りシートと、検証授業後に行った事後アンケート調査（山北中学校1、2年生161名10月実施）に記述された生徒の感想等を分析し、「実際の英語の使用場面」を設定した効果について考察する。

(2) パフォーマンステストの評価結果

パフォーマンステストを評価するためにループリックを作成した（第1表）。「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」の評価結果を分析し、学習活動に対する生徒の変容を考察する。

(3) 事前・事後アンケート調査の結果

事前・事後アンケート調査の結果を比較し、検証授業後の生徒の学習意識の変容を分析・考察する。

5 検証授業

(1) 実施期間 平成27年10月19日(月)～28日(水)

(2) 対象生徒 第1学年2学級75名

第2学年3学級86名

(3) 題材名 外国人旅行者への対応 ～山北駅で～
タスク「山北駅で、困っている外国人旅行者に話しかけられ、場面や状況に合った案内や対応をする」

(4) 題材の目標

- ・積極的にコミュニケーション活動に取り組み、コミュニケーションの楽しさを感じることができる。
- ・場面や状況に対応できるコミュニケーション能力を養い、自分の考えや気持ちを適切な英語で表現することができる。

第1表 「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」についてのルーブリック（「外国語表現の能力」は省略）

項目		評価規準	評価の判断基準		
			A（5点）	B（3点）	C（1点）
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	言語活動への取組	アイコンタクト	積極的に話して伝えようとするために、相手を見ている。	会話を続けられないために、相手から目をそらしてしまう。	ほとんど目を合わせるものがなく、下を向くことがある。
		声	その場にふさわしい適切な声量と明瞭さで伝えようとしている。	その場にふさわしい適切な声量と明瞭さで伝えている。	どちらも足りない。
	コミュニケーションの継続	つなぎ言葉	つなぎ言葉を使って不自然な沈黙をなくし、内容を確認・整理して適切に会話を続けようとしている。	自然で適切な会話を続けようと、つなぎ言葉を使っている。	つなぎ言葉等をほとんど使わず、不自然な沈黙があり会話が進まない。
		相づち 身振り手振り	相づちで相手に理解を示し、身振り手振りをうまく利用し、分かりやすく伝えようとしている。	相づちや身振り手振りをういて自然な会話をしている。	話すよりも相づちや身振り手振りが多く、伝わりにくい。または、相づちや身振り手振りが少ない。

(5) 題材の各時間の学習活動

ア 第1時【場面設定・スキットづくり】

場面設定を教師が提示し、タスクを与えた。タスクは、「山北駅改札口で外国人旅行者らしい女性に英語で話しかけられる。『この電車は小田原へ行きますか（2年生の例）。』等に案内や対応をする。（学年により発問は異なる）」である。教師のモデルを参考にさせ、話しかけられた内容に続くスキットを予測させた。その後、同じ質問のグループに分かれ、スキットの予測を共有し、使用するであろう表現を英語で準備した。

イ 第2時、第3時【リハーサル・スキットづくり】

第1時に続きスキットづくりを進めた。また、事前にルーブリックを知らせておき、一人ずつリハーサルを1分間行った。外国人からの質問や自分の表現を生徒同士でフィードバックし、予測したスキットの吟味、修正、補充を協働で行った。

ウ 第4時【パフォーマンステスト】

一人ずつALTとパフォーマンステストを1分間行い教師が評価した。パフォーマンステストで行った会話を記録しておき、活動後に単語や文法の誤りやより適切な表現方法についてフィードバックした。

6 検証結果の分析・考察

(1) 生徒の感想について

生徒の感想（振り返りシート、事後アンケート調査より）

「実生活に即した場面」について

- ・山北駅というすごく身近な場所が設定されているので同じような質問をされてもおかしくない。
- ・本当に外国人に会ったときどうしようとか、自分から英語を知りたいって思う気持ちが出てきた。
- ・自分の好きなように回答ができたから、話を考えるのが面白いし、リアルな状況だから考えやすい。

「場面にふさわしい主体的な表現」について

コミュニケーションへの課題意識

- ・相手の思いを考えることが難しいと感じた。
- ・どうやって相手に伝えれば一番伝わるかを考えるのが難しかった。

協働学習の有効性

- ・みんなの場面設定を聞いて「なるほどな」と思った。
- ・グループの人に外国人に「なんて聞かれた？」とか聞いて、聞かれた質問についてみんなで考えた。
- ・すごく頭を使った上に、考えることで覚えるし、自分の意見を言ったりできたし、意見を教えてもらって単語を覚えられて嬉しかった。もっとやりたい。

知識や技能の定着に関する課題意識と学習意欲

- ・伝えたい気持ちでいっぱいだけど、それを思うような言葉や文章にすることが難しいと思った。
- ・今まで習った文法や知らない単語をもっと覚える必要があると思った。
- ・思っていることを英語にして伝えられないのがいやだから、単語を覚えて知識を増やしたい。

スキットの予測について

- ・色んなパターンを想定し、それに対応できるようになったのは良かった。すごく難しかった。
- ・会話を予想しても、ほぼその場で考えなくてはならないから難しいけど、できたときは楽しい。
- ・準備が短かったが、暗記せずに会話ができたときに達成感があった。

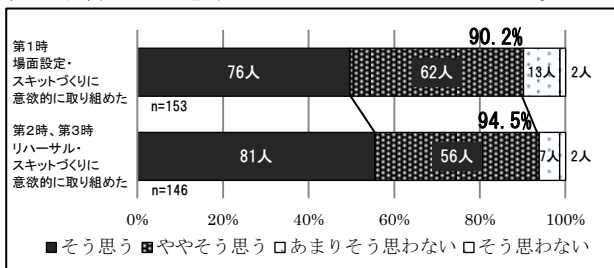
「実生活に即した場面」について、生徒は題材に対して具体的なイメージを持ち、自らの生活に実現性を感じて取り組んだ様子が分かる。英語で表現しようとする必然性と自己関連性が高まっていると考えられる。

「場面にふさわしい主体的な表現」を考える活動では、相手の気持ちを考えて会話の内容を考えるという

コミュニケーション能力そのものが課題となっている。しかし、協働学習によりお互いの考えを共有することで、スキットのさまざまな展開に気付き、その課題は克服されている。また、生徒はその展開に対応するために、より多くの表現を準備しようとするが、既習の知識や技能が定着していないことに自ら気付いた。そして、もっと多くの単語を使えるようになりたい、既習の文法等の知識を確実に身に付けておきたいという長期的な意欲が学習の段階を重ねる中で高まっている。

生徒は、スキットが予測通りに展開しないことで難しさを感じているが、英語での表現を準備した経験をいかしてその場で考えて話すことで、達成感が得られている。

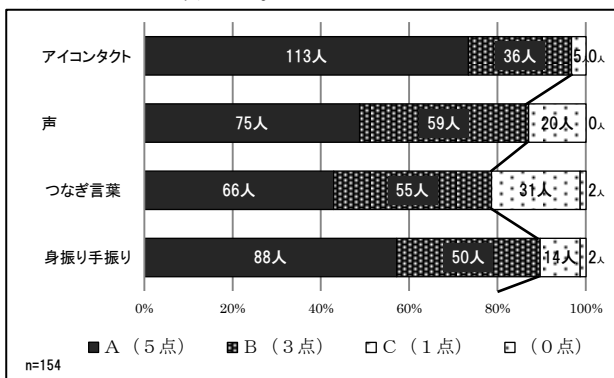
第2図は、第3時までの振り返りシートの「学習活動に意欲的に取り組みましたか」という質問に対する回答の結果である。「実際の英語の使用場面」の動機付けにより、生徒の習熟度にかかわらず、90%以上の生徒が学習活動に意欲的に取り組めたと回答した。



第2図 学習活動に取り組む意欲

(2) パフォーマンステストの評価結果について

第4時に行ったパフォーマンステストの「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」の評価結果を第3図に表した。各項目でB（3点）以上の生徒が約80%以上を占めている。このことから「実際の英語の使用場面」を題材とした学習に高い関心・意欲を持って取り組めたことが分かる。



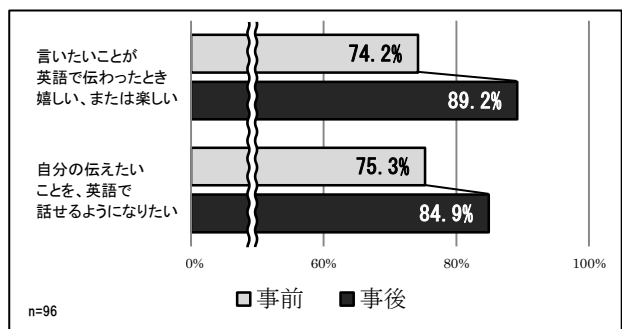
第3図 パフォーマンステストの評価結果

一方で、「意欲的に取り組めたか」という振り返りに対して、「(あまり) そう思わない」と回答した生徒が5.5% (9名) いた。これは、旅行者を助けるために何をすれば良いか分からないという生徒や「そもそも会話をしたくない」という生徒であり、社会的コミュニケーション能力や社会的スキルに課題が考えられる。

(3) 事前・事後アンケート調査の結果について

生徒の感想に「最初は、何でこんなことをしなくてはならないのかと思っていたけど、自分で何て伝えるか考えて、本番で話を通じたときにはとても楽しかったし、嬉しかった」とあった。話す学習に対して抵抗感があつた生徒においても、英語で伝える楽しさを感じ、話す意欲が高まったことが確認できた。

実生活で英語を話したことがない生徒の学習意識の変容を、事前と事後で分析した(第4図)。「伝わったとき嬉しい、または楽しい」と感じる生徒が15.0ポイント増え、「話せるようになりたい」が9.6ポイント増えた。また、全体では91.1%が「伝わったとき嬉しい、または楽しい」と感じ、「話せるようになりたい」という生徒が85.4%に増加した。実生活で英語を話す想定での「やりとり」を体験をしたことで、「コミュニケーションを図る楽しさ」を味わい、「話すこと」に意欲的に取り組む態度が育成されたといえる。



第4図 「実生活で英語を話したことがない生徒」の検証後における学習意識の変化

生徒の感想には、「(自分の考えが) 伝わって相手が『ありがとう』と言ってくれたときに、達成感があつた」とあり、単に英語が通じれば良いと考えるのではなく、相手と意見や考えのやりとりが成立したことに達成感を感じたことがうかがえる。また、検証授業後に、92.4%の生徒が「英語を話すには、自分の意見や考えをしっかりと持っていることが大切である」と回答したことから、コミュニケーションを図る上で、伝え合う内容に大切さがあることに気付いたことが分かる。

研究のまとめ

1 研究の成果

題材に「実際の英語の使用場面」を設定することで、生徒が英語を使用するイメージを持ち、意欲的に「やりとり」を行うことができた。その結果、英語で伝える体験を通して、コミュニケーションを図る楽しさを味わい、「話すこと」に意欲的に取り組む態度の育成に成果を上げることができた。

本研究の手立てとした「実際の英語の使用場面」とは、実生活において英語で話すことを身近に感じさせ

る場面である。この場面の設定により、生徒に「英語でのコミュニケーション」との自己関連性を高めたことで、「話すこと」への意欲を高めることができたといえる。

また、スキットの予測をしてから「やりとり」を行うことが、暗記して再生するだけの活動ではなく、あくまでもその場で考えて話す活動として成立し、事前にある程度の準備を行いながらも「即興性のある場面」としての性質を保つことができた。「やりとり」の指導において、スキットの予測が指導方法の一つとして有効であることが確認できた。

2 今後の課題

本研究で示した手立てを、CAN-DOリストや指導計画に効果的に関連付け、定期的実施していくことで、「話すこと」への意欲とともに知識や技能を活用する表現の能力の育成にもつなげていきたい。ところが、この表現力の育成について、検証授業を行う中で課題があった。「話すこと」の場合、意味が異なるほどの重大な文法等の誤りでなければ、ジェスチャー等の助けにより、誤りがあっても意味を通じさせることができる。一方、授業において生徒が英語を発信したときには、誤った表現やより良い表現があることを、適宜フィードバックして指導する必要がある。知識や技能を確実に習得させて活用させるだけではなく、コミュニケーションのためにどのように知識や技能を習得させるかという視点を持って指導することが課題である。

また、外国語科では、知識や技能を活用する力を育成することが、「コミュニケーションを図る態度の育成」につながると捉えがちである。しかし、コミュニケーション能力そのものの育成が外国語科の直接的な指導内容の一つであることを再確認しなければならない。重要なことは英語に限らず「言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さ」を指導することである。同様の目標を持つ国語科と連携して指導計画を立てながら、各教科においても言語活動をより一層充実させるなどして解決が図られなければならない。

おわりに

中学校においても、小学校と同様に「コミュニケーションを図る楽しさ」を体験させることを目標として捉えておきたい。さらに、小学校外国語活動の目標には、「外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさ」だけでなく、「言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さ」が併記されている。英語に慣れ親しむにつれて、英語で通じたという喜びや楽しさは段々と薄れていく。英語を英語で理解できるようになったとき、生徒が積極的にコミュニケーションを図ろうと

するかどうかは、「コミュニケーションを図ることの大切さ」を知っているかどうかである。高等学校外国語においては、英語を英語で考えることが基本となり、通じる楽しさよりも伝え合う内容に重きが置かれ、生涯にわたり積極的に使える英語力を身に付けることを目指す。中学校では、小学校から高等学校へとつなぐために、英語を用いて自分の気持ちや考えを伝え合う楽しさを味わい、言語を用いて伝え合う大切さに気付いていくことが求められる。コミュニケーションを図る「楽しさ」から「大切さ」への移行、これこそが小中高の連携を図る上での中学校の役割であり、「コミュニケーション能力の基礎」といえよう。

引用文献

- 文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説外国語活動編』 東洋館出版社 p.10
- 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説外国語編』 開隆堂出版
- 井口靖 2013 「文の理解における予測について」
<http://miuse.mie-u.ac.jp/bitstream/10076/12256/1/10C16168.pdf> (2015年12月取得)
- 堀口純子 1990 「コミュニケーションにおける聞き手による予測の型」 p.1
https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=3398&file_id=17 (2015年12月取得)

参考文献

- ベネッセ教育総合研究所 2014 「中高生の英語学習に関する実態調査2014」
<http://berd.benesse.jp/global/opinion/index2.php?id=4369> (2015年6月取得)
- 文部科学省 2015 「平成26年度 英語力調査(高校3年生) 結果の概要」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/07/03/1358071_01.pdf (2015年11月取得)
- 文部科学省 2015 「平成26年度 小学校外国語活動実施状況調査の結果 [概要]」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/09/24/1362168_01.pdf (2015年11月取得)
- ゾルタン・ドルニュイ 2005 『動機付けを高める英語指導ストラテジー35』 大修館書店 p.32
- 田中武夫・田中知聡 2003 『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』 大修館書店 p.29
- 松村昌紀 2012 『タスクを活用した英語授業のデザイン』 大修館書店 pp.8-9